

東日本大震災

く一日も早い復興願うく

行く春や鳥啼なき魚の目は泪なみだ

緑深まる東北から列島を横

断し、日本海側を巡った芭蕉。

「奥の細道」は、東日本で出会う人と風物が、貧しさの中にも生き生きとした往時の地域の表情を伝えていきます。俳人が今、同じ道のりを歩いたら何を見るのでしょうか。

岩手県生まれの詩人・宮沢

賢治の「雨ニモマケズ」の詩への共感が広がっています。

「：東ニ病氣ノコドモアレバ 行ッテ看病シテヤリ 西ニツカレタ母アレバ 行ッテソノ 稲ノ束ヲ負ヒ：。」

東日本大震災の惨状を見るにつけ、芭蕉と賢治がふと思いつかびます。

支援の輪が世界中に広がっています。多くのボランティアが被災地に駆け付けています。私利私欲を持たず、進んで人の苦難を共有しようとする精神です。

愛する家族や地域を守るために、自らの命をも省みず津波に向かった消防団員。自ら



市も被災地に人と物資を送る

も被災しているにもかかわらず、地震直後から消火や救助、避難誘導、救援物資の搬送などの活動を行っています。

今回の震災は、歴史から繰り返し学んできた私たち人の営みがかろうくも崩れてしまった瞬間でもありました。

犠牲者の過半数が60歳超。

地域や人の絆きずなをもう一度つなげる知恵を積み上げることが、復興の鍵に思えます。

賢治が残した詩や童話を愛する人が多くいます。

いつもなら、大きな期待に胸弾ませてスタートを切る季節であったはずです。

指宿市長 豊留 悦男